中村俊定文庫
文庫18
434

遠筑波

明和四

宮城県図書館

ことのきわまれるしるべ詩
あり京の連歌あり俳諧
のまことのをかもてきひろ
まやまず市屋の一市に
たゆたてはうえさゆるはるる氣
むすきたるのかぬのを

中村俊定文庫

うたゝうるあれふ　男佐女然乃
ゝもしをもつまり月のむつ
まゝきたなめ　ゝりうるゝ長雨
なあれまを　をゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
清代を　何あき　ゝ　ゝ　ゝ
きあゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

元日や山を別るゝ氣波　春義
つまり長雨ふ橋る頻扶　李井
ユミ片ゝ何ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　全
行ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
梅干る白ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　義
義乃ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　全
名ゆの衣むつゝ　ゝ　ゝ　ゝ　井
山水ゝ日を　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　全

横伏して先度の雪は氷つゝ　井

何を（志）おもふて揚屋寂寞　義

嘘つゝもあるりそもも恋乃こと就て　井

美男　志やつゝう癪の恐　義

ゆゑ加屋り庄ゝ月あはゝ毎誠　井

嘯ゝやつゝ田の日ゝ一日　義

ちと細ゝて南寺はやつこ（奴）也　井

弦さんゝ八ねてちゝ　義

月花の坐ゝゆゝ水の舞　井

躑躅足ゝゝれゝの幕　義

ゝゝと廊乃ゝ　仝

限元ゆひみわゝ（童）ハゝゝ　井

かゝりの袖ゝ物の（寝カ）あゝ　義

ぐゝゝと廓乃ゝ　井

翌ハ袖（詞）を焼ゝ凡のゝ　義

百里外　抜を寄ひとつ　井

椎の葉に朱打ちまぶしたる粽　義

煮へも立たれぬ釜を天の井

口十文字なる宮をかくしと　義

ふれ出でたれ初の分代　井

焚捨て塩屋を取る浦の月　義

数々多くなる新の群鶴　井

駒引の占ふ菓子とりのべて　義

居ながら床もみ宮も人形　仝

炮烙きらきら稱る翠屋の鍋　井

ちゑの鈴も猪かすむし　仝

花は雲おぼきに馬をれて　義

鶴鳴つゝひの本きる高の口　井

きはまりあるもの
小野法さんと申されしを
なのめまゝ相もの所日の
なきめさまあふ乃ふ程を
いろ〳〵を松原乃宮乃
つとひ事ゝ人のもの法
神乃をすたりなとそう
こゝろ〳〵

月とやとゝぬ御ゆり代 大盛
清引寄も仕ぬあゝう て
いゝ事なく殺き庭廣の外ゆう 万国
入部尺まとすと不記まゝ 宗
きゝ〳〵に勢ゆへとる二軍弱 軍
軍をこゝ上の一の分常 大
敢為る僧ゆゝ乃を所きあて て
きめ事る意よゝ法傳なき 同

物衣のたたむ乃袖をたみく引　保
月に夏の羅伏讀を吟ずる　義
年薬進る音と冠の圓境　丈
古紀や訪ふ月雪乃詠て
志りうをの病ふす眠中きを　因
楽箱乃名ふ乃仙箱なよ　保
小宿うつ麦の裾を折つる　義
うちぶハ位く枯ぬうつハ木　丈

神ふるうんのる場ふ菜種乃花　春義
写絵の鼓もふ乃ふるき　湖天
ふるものお春乃接穂を猶ハ集て　元
の春つちあ川乃名を月を竹　李丈
いつるをく榎の猫ふみまち月　因
松竜の垂ふ羽織を　て
蓑沽と秋の好きを志やとうまをう　丈
汁をかゆ乃ハまるふ菅麦喰　保
　　義

あるも遠くて遠ぬ十とせ過ぎ　丈
日乃めとしもしぬ門の朱殷　て
義忠公てなりきかれ乃きあくて　義
姉ハ恨の孫なるぬるし　保
灯篭の蓋にも言乃一板り　て
浮りうくさゆる晩清　む
淀舟乃底も法師とうれて　保
君り吟へて花乃つきなれ　年

ぬ茶の札りもて月ハ出なり　て
うんこと見る人ひとりお　年
雑煮みて都もめてなき花餅　保
ゐ泊りを元て休む万年　国

万仞乃青山を雲に聳へて
頂を八千尺の瀑布ハ
霧より落て深淵を

滝津瀬と一かたまりや峯の雪　存義
雲乃山路の宮きかりまあ　如英
さとめきハ爺ゝ耳ゝ虹の如て　民那
雲乃ゝ高ゝ厨ゝゝゝ　百柳
風ハ月月心棟や金ゝん　桃里
落を分て細き庫宿　可因
神立と云て体ゝ好葛の花　英
いさもゝ胸を打る潮に　義

去ハ咲きそろう矢にむと志の宴　柳
いゝ川の河〻を清る夏風　那
紅葉く松も老木の枝しるさ　因
夷なゝも世に治る人　里
七川のあさと紀ゝも表なり　義
浦乃中に盃のとゝろし　英
負一ぢ七月ふる富ゝ彩の妻　那
毛尺の栗和ゝ狩ゝろ亦　柳

古沢の高蒜ゝ冴一水の色　里
三百へ蔵ゝ晴ゝ雷　因
逗留み走ゝ色ゝ彩る蛇行寮　英
魚乃猫ひゝ指仰ゝ　義
紙ゝ紙宮ハおゝて加茂詣　因
蔵ゝ栗振ゝて冷蔵庫ゝ　那
栗なゝ中乃炭ゝハ角色　柳
新屋も ひゝろゝ次男三男　里

居間かゝ情てゝぬて抜出れ　義
掛〜扇ハ抜もやゝぬ乱　英
張る故の夕を八しき蔵の月　那
涯を突てゝ行御　蕣る　国
物侍さめ此世乃鬼をそ　里
鳴ちと長さ宗の泥糊　柳
引敷〜凡門の袖も面白　英
物を遣話き変りて変　義

宵鐘の門風さむゝ枝の揺て　柳
炬　斜て米炊〜紅　里
乗に自由乃ぬる乞の戸　国
ちらゝかゝ人参乃畦　那

花ちるかぜのなごりに月さえて
独ねの夢さめがちなる
さとびとのこころおもかげ
ちるかぜつきてやはらぐかこの
なるも我ならぬうつせみゆく人
ころろかしし

妻おもひやまぬ夜衣　存義

涙雲をなる苔ごつ月　圭橘

引捨る例ふる苔のまくらにて　六器

日向おこなる山乃関ち　年

月星と時雨もこのまに降ま　構

小乃ち屋ち鳥賊を詳のこ　宏

俗画の光来ふるも離屋乃　年

寺の庵の方いち誘　構

木の陰よ書の為して餅川　定
壊て去はすくかるる弟番　茅
童さく髪ゆみて孫を所　仝
之世相るる悪のつるるき　定
横笛の行地をはるるつり　仝
医師小庭の月ふみ打　橋
いりつもいまるはるる行安船　仝
茎五本敷色をき凡舟　茅

水門をのしむりの花鏡　仝
大うつ石乃それ住まる　定
分常を傳まるるき宮師及　橋
岩の洞を建る作会　仝
そう豆を境よ畑を中鶴　茅
去孫うつく百成乃爺　定
月油のたを吸のをたきと　橋
お茅やう連れ孫ま　茅

松蔭の魚籠ちらばりて休むん　宗

賽ころの目て戴くもの　橘

にくにくに札ちぬん濱枝宿　年

蕎麦かきしやと蕎麦ゆとの　宗

小角力の横根痛る月の夜　令

初雪る　汐乃和　年

読庵人にふつる毛蓼ふる薄　橘

影ち孤の田令新蕎麦　令

急くおとそれ墨を拭るやう　宗

華月もなにふ業乃夜　令

宣も峠池の地乃住つきて　年

さ侍のうろのそひ高　橘

青柴うちすて舟のもやひ引
からみつくあめしぶきわけ入る
わくらはの入いとなみをふる
蓑めき孫く囲炉裏のすゝを
焚くきおこしつゝむひとりみる
かなしさ風うちすてたる
のゝちすゝ河原おりてをるめ
やるすゝ

鬼の巣持例ゑかるすゝ月百　存義
石下寺　柳蘭の花　仙呂
旋訓しおもふに出家奉れて　柳志
引手乃宛を頼ゝる佛ゝ　泰星
義越下脊中を照ゝる桂新　呼童
聖の者雑み　拾めつゝし　逸志
去みゝしんやけきまひれ　呂
里居のそ尾もすゝ　榜　横川

杉ひきや元の筆本に仇揚枝　里
うき世乃さ為を出て入あ　呂
坂本をとゝとゝ一川松　志
宮まふこし　探幽の新　柳
ゑ河ゝにゝ気ゝ竹し迄　童
冬ゝ又来ほ　衣更着の雪　義
彼岸まも質杉ゝ寺と寄ゝ　川
花待しゝ亀ゝ啼ゝ　里

雛たつる戸棚を二日三日の月　義
鏡を干に門よ見よき乃几　童
胡夕にゝも牧十二天　柳
醫者しゝ志は世を捨　義
剃ゝ髪も菜漬て宮の涼て　呂
帝月はし祇園会の夜　志
時わる赤ゝのむゝ鳥　里
名人ゝの碁の出る　川

蓋そもそもしもの歌く酒鼓渇　童

家和光をそ　松風乃本　柳

かゝらはをそ今庶一たる野鶴志

袴焼ひ乃獺のをられ男　里

る女屋見人在水戸乃祝町　川

いや入おてあ孫の秋の日　呂

亡骸て古き屏風の花ゝき　義

近江の伯父をとゝやまとと　童

繁佐ゝやく舞ゝき指田川　志

高ゝと指く女袋　川

聖代を下司のいを花すて　柳

几巾乃孔風の屋風　六器

桜の衣さまさまけのく
つゆまき神やーーるん

法螺貝の順の巻の清ふ分　存義
一ゆかちをを行る　日盛　念堂
狂歌をとやふふ祝つきけて　文奥
叶敬　秋のむ屋を冨寄り　雑口
竹の素さまれて我月の秋　樓川
夥上戸いろよ如ぬ子　葵足
ち思を作る家新々　新帝　泰里
お飯あれとるけかいゆし　茅

うつくしきの秋ふかしと思ひ出る湖月抄　堂
香ゝしく鼻を廊一ちり　美
さつゝきや戦場の方へ久しく　口
秋を知る灰汁のたまり粕　川
整女連れ立て説経かたり月待　兵
角の敵乃奏もかなりは　里
冷しや破れの詳は情なり　茅
阪山寺乃夏れ寺深用　堂

花を掃くゝらを食いなる人やん　美
詩のようやうとまてハ紙玄　口
床ゝ乃掃を情を誘れて　川
酒なるとゝ陽女り一芸　茅
秋ゝと砌まれの注馬子　里
きのふゝ乃ふを疲急れ　兵
神軍をゝかるるよりわれ　堂
寿なし川を細い節をと　美

法徒を云出し合歓の花の陰　堂
法事過ぎて庫裏に訪ふ　里
夜猫乃いたづらもなくなりぬと　茅
夜半に仕舞ふ板借りぬ毎　口
て明る月明の縁と流れ入る上　川
猿戸をなほ小山風　堂
すまをしたる許なぬ妹の家　兵
桜かとうきて寄たる　魚

十二月枕ゝ屏風ふ掛　敷　堂
峰を尾上もあの明る　穂　里
日を撫ゝ新の花まんま　口
たゝたゝ炉の焚かけるふ　川

烈士暮年壯心不已

子を抱て行ひ過る辻相撲　存義

のて居暑きの門を出る月　巻卿

蘭乃香の芥と暫く問ふ　文佐

山伏案内ふ笄を拾ふ　珊之

力尽踏て芝越ぬ夏草　錦帳

赤縁を下に居かゆる寵　常仙

俗子に良い風の辻みしめる　卿

瞽女ふある仁母の徒ーき　義

小嘯うちをたる夜の深かな　之
ちらひらくよ　きき　雪　佐
春ちかし山茶花の弱仕舞し　竜成
伊勢乃孫ひよ子代寵る　帳
大松を漆の花うたてわて　佐
油菓をうる彼麿うの梅　卿
殺ひへ新さくしわきて初音とう　義
きのふ竹ふり云伝をうく　成

搗の日簾を徹して駕の内　帳
松ちきして昼ハ夜田刈る　之
冬のまるとなりたるもきた　仙
狐りついうめ奴ゑ疵ゆく　義
我ゆを巷ふ貴ろ船ふふ　之
續き日和よ神垣の塵　卿
ぴよしと樹ゆりたる鶏の雛　佐
いんそまして井ろく骨板　帳

柄杓数珠手にもたれ杖の松　卿

夜の月人も泊るを〜

と引く鶯啼きて涙ひさし　仙

惜貴記しやうきやうれ　帳

袖ふるの鶯の言　之

高砂に住まる　義

谷川に流るる青胡桃　義

十二三〜　仙

菜湯の白ひたつ〜我り飽　佐

風雅の歌の俳名遠ひろ　卿

庁隅り稲荷祀りて庭のも　之

供の伝をそれる雀子　仙

唐の国門井亭といふ亭を
ゐる時

萩原や花の耳に聞きかし　存義

朝寒ゆるぶ出る岩刈　杜曉

とかロの盥ゆ月の移るゝ　千路

かしらゆ地震ゆ遠ゆ　一調

暮るかとに引をちきゆ冬ゆ紅保　鳳陽

翌も日和とえゆる夕陽　蘭江

雪隠ゆ居ゆ住僧の独ゑ　莱陽

因果つくし云ふ事ゆ酒　平

まろう今洗ぬる袖を置れて　暁
夏はへるきの赤の下石　路
ときかしとかきもの行我恋　調
文箱の蓋もありてうすき　鳳
京の時やまりを色さてを　蘭
藻を埋るさきたまの月　菜
小雪を笑ひつる行布施治　暁
昆蒟をすと桶てうく　義

＋

登ひとう茶入記の乃庵　路
はるる柳のいつゝ之抱　調
武蔵八幡をうるて迎ひ馬　鳳
なるる思へて泊るる　蘭
ゆつりそのまを不貞振の君　菜
でにたるまる浪の荒淡　路
堂人乃屋を寄て乃屋し　義
掘り飯して通ふ学校　鳳

長押うち倒れ扇ちーてきる　暁

下向の賀るに紅葉うつよき　菜

子を負ふて走んとかりたる雲の月　蘭

ちんちんかいきて狭ち背ぬき　義

淡合色鉢合て仕廻り　調

結氣の天て狂競ぬ舟　鳳

〻雲とちり面とかんとうくとも　路

ゑまと狂なくの行跳うう　暁

（曲）

天井の嵐をはらを梭櫛帚　菜

ねりを色てを寄しうを　蘭

ここここ地ちかん花所　調

雖　難入ぬるむ影ち　執筆

百俳ろきくの花咲ぬれて
なれと素乃海あるとうすく
よ〜妙演と芳の人を宮ひ
ふきと

ゆく〜高の屠蘇すゝれ酒の石　存義
長閑とふよいなと乃林　阿誰
旅人乃馬ゆ傳やはる月のかゝ　圖大
凡我なてゝを解ぬ風景後　可因
迷いゞと呼の水へ衣ゝゝを　浙江
素乃つる切る木瓣の多　大
菜れ尚のゝうゝ魚を買ふ出て　因
なゝみとなれて大も褸引　茅

忘の世や蒲の穂乃泊りも　大
ゆきゝ船又泊まする　誰
羽打ちそゝぐ水むる入る夜　茅
髢を梼となき泉乃紅　江
みゆく小一の繁ちを二挙散　誰
遊芸茶付月を師の坊　仝
彩蒼麦もむき啖する田舎人　冏
蔬と考れ石の蔦椿　仝

打惜みき桜乃花　江
咲ゆくつひの京秋嵐に　大
猫の妻棄しわすれと戻されて　茅
莽実をとつ寮の日毒を　仝
被ゆて伴所とて人生きの色　誰
蒔繪文管の内うゆき　大
竜城の門敲ちはきうち　冏
飯を咎めて遊る野狐　誰

洋々たる田植唄　茅

かるる百姓のつかれたる　同

廊先の柱ふりたてつゝ帰　大

旭丁　艶をくかる里芋　淮

松よりも月の友人誘しつ　茅

云伝つゝやすし計之　大

家とのゝ高みかつの宿ちつゝ　今

藁の衾乃ふすき及ハし　茅

風ふきの高ゝなるを拭寶ゝ　今

鄙　弱る川の岸のやまみち　同

海道を立の謡を花はそゝ　今

世間の忘れぬゝ　簾　誰

今年斗囘有九月

納涼

いくたびか秋

一夜数月の

夏山小倉を蔵者るり里

山路を登りくれる蓼

高ひのみ里を十里も

如此の義へろろ湯法して

それもしくえきちれ

存義

泰里

呼童

柳志

仙呂

露貫

可因

葵足

元彼乃狩びを見て　松嶺子　素堂
羨むまうう　徒弓金持　春来
駕下りて　れ雨の音色　眺やれ　柳志
急る　孫子　猿のかしてき　峰童
命みもかくぬ　弟のと　秘義して　高丸
軍にきちし　敬をめてなき　仙呂
よしのしか　我をうしるの　敬　葵生
格川を　はよなきて　孤火　の因

丈イきけの尾花を目はしつの川　峰童
国のたなし　お萩をほしる　柳志
尼訓ぬちハつ　ぬりれ物を　春来
釜て未　ぬくきのおうき　素堂
庚時雨の　鶯　北上ぬる　仙呂
情奥　焼ひう何すりの　孝　高丸
返辞を　姑絶の　知ると　今　系　可因
庵井の　汐　瓶漏れ　さとりあり　葵生

多雑そそぐるゐと夕間暮　柳志

新の友のさて噴　琴ん　吟竜

意ずさいり物喰の名ふて　素里

渉猟あるさと桃のきぬし　春秋

翌ゆるり西寺月の山ろ　古明

るゝきゆみて　城いゐやつく　可国

為意と武士のきいきの友さな　素丸

おや年寄まゝ重ゝ　紀氏

新年二階の琴ゆゆそれく　春秋

ハ川てゆゑと　はをあそふ　素里

松ゝ乃北勝も　ゑんも花の言　可国

七弓の矢たゆゆゝしき　古明

かまくら山ときの寺の十勝を元
八幡人詣て生死解脱を願
ふ詠りあり　京を去て
くやとて眺りをうつす一入
うるをうをうをうをうをうをうを去る
場の体を殘して松風も
何とする者をうひたる侍

十念を慶て　随如十夜を
撞木の僧の袖をさ月　存義
生碧のそよ立なと焚火して　鶴志
きぬぬをうをうを夜来る急　理珉
植付る面を多やおをぬうん　享馬
京の乙乃生年山の井　都容
さうをうを通を支度の葡萄夫　薮仙
来を形うと墓物の拝　冶常
　　亀成

桂の葉に蓋れし屋のさま　志
そそ昆陽なる女おさなき　平
まひ人の為きぬ袖を弟れり　馬
中を移りそふ焼論し　珉
血をとめる叶を与へ樹屋の門　伯
書みきを一枝縄下結ひ　容
千邑は術の叔父行つ野の月　成
人訓てもとなきぬやしや附子　常

きをの駒は花の陰　容
草の葦下見を這きて　志
まに枕まれ屋敷を出でし　珉
忘れも枕器杯の鞦　馬
我おもふ夫い病ひの間屋まで　常
老て妻子も戯きて　平
桃桂節の住居のたはむれ　志
まを語をれそのつあまき　成

ゐる山を見るゝ時めきまさるもやさを　容
刀自々遠ひハきをとゝつくき　仙
まつ秋の懸ふ鹿ゝ弱竹て　茅
かゝる角力ふかしまき月　珉
川霧の懸隔つるかをる　馬
夕ゝの樹ゝ寺の鳥を鳴ぬ　常
奇ぬしやと庭氏の動を奏しや　仙
いつゝ女棲姫ゝ蒔押やる　志

雪ゝ初ゝ二川ゝゝ酒　常
面の堤を分ゝ情ゝゝ　容
錦葉て淀才尺ゝ旅もの里　馬
麦色ゝゝ沒ぬ夕の鶴会　仙

擬花假月十分模様

做得妙

新月をやどす敷ものとうつるなき　存義

酒のいきおひ　古友

田をうつて宿へかへる　翠城

雲ちかくし夜の明るし　田男

ゆるる枝のうすより高くる風妙月　春竹

ゆるるたもむ棚の鉢栗　弟

麻売の笑ひ形くる秋のまて　友

されて女我思といふある　嫁

惟茂乃哲しの多も情なし　男

凡一杯とちまき多分食　廿

うきうき旅うきうきも志めす海へ　嫁

餅やらぬかと坊り耳寄く　友

骨牌うつ例よ新のうまよ　年

望を打とる方の大雪　男

国栖人を花の如の為ぬる　廿

書賣形全き後よき　年

さ一登ぶ月をちまけの塩雲　友

餅の雲遠仏新さむる　嫁

吸付て雪と云う花野行　男

人せもの買むみを海へ　廿

梁の下に宵寒の鷺を　年

貝おはいまや海へ相撲　友

往来まつ子来ぬ父金細き義　嫁

色も多の雛の皐月降る夜　男

関乃戸に笠病む冠者の姿し　艸
飯みを湯よりも洗ひうら　笑
長屋うれ又筆筥の小云つる　友
月下四十の白髪かな婦　嫁
利鎌の穿屋の来て寄れり　男
夏炉　胡麻炉と揮るやう米　艸
弾き奏く奥もち記念写真　嫁
又かくはるる書肆り廃物　友

之男の手象を人の参らまて　艸
畠うなゝて　蛇穴を出る　男
花待や沼象屋の山の祇　笑
串柿乃形もたるひなり　独笑

唐木の儲

梅柳併あり書う今まても　存義

すくく枝もも俎板て切れ　竜眠

下駄の歯乃高さ姫高小袖等　仝

とり白ひもさまも知る太　義

蓍代月　桃商ひの屋ゟ　仝

帯をかくまも　板一枚　眠

うき春の額ゝいけりあつき春　仝

銀を結ぶ　岳　住ゟ代菓屋　義

宗をつたへし法偉ゐやまこの方　義
唱へ奉ふるとこそ〳〵合点　眼
よく〳〵これをよなる教とおもへども　今
御法をしる人皆金剛　義
開合の相をもつ物もなく　今
物も調ふ瓶なこの清　眼
花ちるあいだの利益空寂　今
なれいとうきうをを指す　義

法合を法間奉乃為とも　今
法をもをきゝのうちに　眼
山越えて来る嵐乃声あに　今
そもやと激乃命からし　義
佛祖も木偶の坊ともあるかき　今
下旬をつゝて現乃言　眼
庭時を告げみなまれつき　今
夜を社丹乃華ひらくなり　義

酒つゝ殿下日蘭る宴やゝ　今

ゆゝ多ゆめもまゝ知れぬ川　眺

かゝるまゝ八月もゆ秋て　今

姫ゝ多ゝ月を見ると　義

毛ゝの夜を出むる夢ゆゝ　眺

夢のなひまて志まめ橋　義

石橋ゝ覇業むゝき見の音　眺

見ハ伏見ゝ匠笛の僧　義

裏かゝハ暗闇の家濃ゝて　眺

仕業の間ゝを運ぶ猫　今

ゝ此花杉の塔朝ゝ連　櫻　義

出かゝり術ゝ者を呼ぶ雲　眺

出冊子也此潛未練法筆ゟの
ゟ ち へ入角ゟ の ゟ ゟ ハ ゟ ゟ ゟ ゟ へ
此指南玄錄ハ梨所へて他ゟ
及ゟ ゟ ゟ 安ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
の也古本菴乃ゟ李干鱗ゟ
ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ

ものゝ古跡おのづからあらはるる
敬味ゝ尊崇を社中又ゝ
所蔵ゝ遺物の粉失を新
のゝ郡自治所設置
昭和四丁巳年冬

彫工荒木又刀